

チベット俗人官僚の子弟教育

— 18世紀後半期のカロン・テンジンペンジョルを例に —

小松原 ゆり

要旨 チベットにとって、18世紀後半期は近現代の政治構造が築かれた重要な時期である。しかし、この時期に関する従来の研究は、清朝の対チベット政策に関するものが中心であり、政治の担い手やチベット社会・文化への関心は薄い。そこで本稿では、この時期に内閣のカロン（大臣）を務めたテンジンペンジョルという人物を取り上げる。彼が奉職するまでに受けた教育を、18世紀のその他の俗人官僚のものと比較検証しながら、チベット俗人官僚の子弟が任官するまでの道のりを提示し、当時のチベット政治ならびに社会に対する更なる理解を求めた。その結果、以下の点が明らかになった。第1に、教育形態を見ると、18世紀後半のチベットではテンジンペンジョルのように家庭内私塾、もしくは寺院での学習という形態があったが、どちらもニンマ派ミンドルリン寺の僧侶が教育者として関わっていた。第2に、内容を見ると、テンジンペンジョルはチベット語の書法・文法と詩学、暦学などチベット仏教に基づいた伝統的学問を学び、武芸を身に付けた。これらは彼独自の教育ではなく、俗人の貴族子弟にとって基本的な教養であった。第3に、テンジンペンジョルは、政府の俗人官僚育成学校ツィーカン・ラプタに入り、実務を学んだ。通例では、同校は任官のための必須機関とされているが、18世紀後半期には官職の父子世襲の影響が強く、同校での学習は必須ではなかった。第4に、テンジンペンジョルが学んだモンゴル語は、18世紀後半期にチベット・清朝の共通言語として認識・使用されていた。しかし、チベット人にとって「学問」とは、チベット仏教の教えに基づく伝統的学問であり、モンゴル語はあくまでも清朝との政治的関係を円滑に進めるための道具という認識であったとすることができる。

今後は、更なる事例検証を積み重ねて教育の全体像を把握し、19世紀以降のチベットに対する諸外国の圧力が教育に与えた影響についても、これからの課題としたい。

キーワード：教育、俗人官僚、テンジンペンジョル、ツィーカン・ラプタ、モンゴル語

はじめに

1751（乾隆16）年、チベットではダライラマを政治の長とし、僧俗4人のカロン bka' blon（大臣）による内閣 bka' shag が政治の補佐を行う政権が発足した。この政治体制は、基本的に近年まで受け継がれており、18世紀後半は、近現代チベット政治の基礎が築かれた重要な時期とすることができる。政府の構造は僧俗の2分野に分かれ、この時期の俗官は貴族のみが就くことができたが、なかでも俗人カロンは、デボン sde dpon と呼ばれる貴族階層⁽¹⁾出身者のなかから、父子世襲によって輩出されていた（小松原2010：60）。彼らはどのような教育を受け、官僚として政府に奉職していたのであろうか。これまで同時期のチベット政治に関する研究は、清朝の対チベット政策⁽²⁾など清朝側から見た政治史が中心であり、チベット内部に注目した専論は、ダブン mda' dpon（武官）に関する研究（片桐2009）や、カロンの選出方法に関する研究（小松原2010）の他は、ほとんど存在しない⁽³⁾。政治の枠組みばかりが論じられ、政治の担い手や彼らが生きるチベット社会の実態が明らかになっていないのである。また、チベット貴族に関する研究では、ペテック氏による18世紀以降にチベット政府の要職についた各貴族の家系や構成員に関する詳細な研究（Petech 1973）や、次仁央宗氏の主に20世紀の貴族を「家庭」という視点から検証した研究（次仁央宗2005）は存在する。しかし、いずれも各貴族家庭の構成員や婚姻などを主題としたものであり、貴族が受けた教育に焦点を当てたものではない。

チベットにおいて、学問の中心は寺院であり担い手は僧侶であることから、寺院の教育制度や内容に関する研究は盛んである⁽⁴⁾。一方、俗人に関する場合、アヘン戦争の影響を受けた清朝の指導下で始まった近代教育、20世紀に入りダライラマ13世やイギリス、中華民国などの外部勢力によって進められた新型の学校教育、1951年以後の中国共産党の指導下による教育など、近現代教育への注目は大きい⁽⁵⁾が、前近代については、いずれの研究も20世紀前半をモデルに伝統的教育を概説的に紹介しているに過ぎず、時期を特定したり、内容を具体的に考察したものは皆無である。

そこで取り上げたいのが、18世紀後半期のカロン・テンジンペンジョル bstan 'dzin dpal 'byor という人物である。彼は、首席カロンの息子として生を受け、官職の父子世襲という慣習に従いカロンに就任した、同時期を代表する政治家の一人である。18世紀後半のチベットの内政・外政が安定していた時代に、テンジンペンジョルはチベット貴族子弟として、未来の俗人官僚として、どのような教育を受け官職に就いたのであろうか。

従来の研究で主に利用されてきた漢文史料は、あくまでもチベットを「外側」から見た間接的な情報に過ぎない。またチベット仏教の高僧の伝記は、宗教的功績を中心に記されているため俗世に関する情報は多くない。ところが18世紀には、チベット王・ポラネー・ソナムトブ

ギュー pho lha nas bsod nams stobs rgyas (以下、ポラネーと表記) やドカル家のカロン・ツェリンワンギェル tshe ring dbang rgyal など、チベット政府の要職を担った俗人官僚の伝記が複数存在し、テンジンペンジョルの半生も自身が記した家伝 DPN に残されている。彼らの人生の記録から、当時のチベット政治、社会、文化の様子を具体的に知ることができるのである。本稿では、DPN を基に、テンジンペンジョルが俗人官僚になるまでに受けた教育を、ポラネーやツェリンワンギェルたちが受けた教育と比較検証しながら、18 世紀後半期のチベット俗人官僚がどのような教育を受けて奉職したかの一例を示し、当時のチベット政治に対する更なる理解ならびにチベット社会を知る手掛かりとしたい。

なお、訳文中における()は筆者による単語の解説、[]は筆者による補訳を意味する。

1. 教育形態

(1) テンジンペンジョルの生い立ち

テンジンペンジョルは、1760 (乾隆 25) 年チベット貴族ガシ (ドリン rdo ring) 家⁶⁾ に誕生した。ガシ家は、1721 (康熙 60) 年にジュンガール軍の一掃への功績から内閣のカロンに任命され、1727 (雍正 5) 年にカロン内の拮抗で殺害されたカンチェンネー khang chen nas (ソナムギャルポ bsod nams rgyal po) によってチベット史に登場した一族である。DPN では、ガシ家はツェン地方のシャン shangs に先祖伝来の土地があり、ダライラマ 5 世の時代に政府の官職を得た貴族と説明するが (DPN:1-10)、手塚氏はカンチェンネーをチベット人ではなくホシヨト・モンゴル人とみなし、DPN は故意に彼の出自を隠している可能性を指摘する (手塚 1995)。いずれにせよ、18 世紀初頭にカンチェンネーの軍功によってチベット政界に頭角を現した一族であるといえよう。このカンチェンネーの甥が、テンジンペンジョルの父・公パンディタ gung paNDi ta である。公パンディタは、1740 (乾隆 5 年) 年に兄の後を継いでカロンに就任した後 (DNP:32)、1750 (乾隆 15) 年のチベット王・ギェルメナムギャル 'gyur med rnam rgyal の乱を経て、翌 1751 年にダライラマを首領とし 4 人のカロンから構成される内閣が成立すると、引き続きカロンに任命された。以後、1791 (乾隆 56) 年の逝去までチベット政治の中核で活躍し、乾隆帝からも信頼が厚い人物であった。彼はその名の通りパンディタ (大学者) の号を持つ学識深い人物でもあった (DPN:32)。

また、公パンディタは、ポラネーの娘デデンドルマ bde ldan sgröl ma やツェリンワンギェルの娘リンチェンキゾム rin chen skyid 'dzom と婚姻関係を結び、息子のテンジンペンジョルの嫁には、ダライラマ 8 世ならびにパンチェンラマ 3 世、4 世の親族の娘を迎えている⁷⁾。二代に渡り有力貴族と婚姻関係を結ぶことで、ガシ家はチベット政界における立場を強固にしていっただのである。テンジンペンジョルは、1781 (乾隆 46) 年、内閣のトゥンイク drung yig (秘書官) の役職に就いた後、1783 (乾隆 48) 年に、体調不良の父の跡を継いでカロンに就任

した。通常、爵位・官職は父親が他界した後に息子に相続されていたが、テンジンペンジョルのような生前譲与は特例であり、当時のガシ家の勢力の大きさを窺い知ることができる⁽⁶⁾。つまり、テンジンペンジョルは18世紀後半のチベット内政・外政がともに安定していた時期に、カロンという政府の要職を勤める権力者の息子として生まれ、恵まれた環境の下に成長し官職に就いた、二代目政治家であった。

その後、テンジンペンジョルが1788（乾隆53）年に28歳の若さで首席カロンになった直後、対ネパール戦争（第1次グルカ戦争）が勃発し、彼はグライラマ政府の代表としてグルカとの講和交渉に赴いた。1791年の第2次グルカ戦争では、ネパールや北京に連行され、異郷の地を踏むという当時のチベット貴族として稀有な体験をしている。戦争責任を問われカロンを免職された後も、デパ sde pa（地方長官）の職に付き、租税徴収などで活躍したが、1798（嘉慶3）年に辞職し、政界から引退した。カロンの息子として恵まれた環境にあった前半生に比べると、カロンに就任後は苦勞の連続であったといえよう。

次節から、テンジンペンジョルがどのような教育を受け、官職についたのか、順を追って分析を行う。

(2) 家庭内私塾

前近代のチベットでは、官員、貴族、大商人、領主などの場合、家長もしくは何軒かの家が共同でその家や荘園に教師を招き、自分たちの子女に教育を受けさせる、いわば家庭内私塾の形態を取るのが代表的であったとされる⁽⁷⁾。少年期のテンジンペンジョルも、同じく師を自宅に招き教育を受けていた。

'di skabs kho bo rang lo lnga'i thog slebs gshis yi ge 'bri klog gi dge rgan lta bur bya yul drag btsan gras kyi mi ngo sri thar rdo rje zer ba 'di ga'i zla gras drung yig gi las khur kyang byed pa'i ngo nag zhig yod pa de bzhin 'chun che khyad ched bskos mdzad (DPN:132)

この時、私（テンジンペンジョル）は5歳になったので、文字の読み書きの先生として、チャユルを治める郷吏の人シタルドルジェという、ここ（我が家）の友達でトゥンイク（秘書官）の任務も行う怒った顔つきした者を、このようにきちんとしつけを行うために、（父の公パンディタは）特別に任用なされた。

チベットでは、7歳前後が教育を始める適齢期とされていたが⁽⁸⁾、テンジンペンジョルは5歳という早い段階からラサの自宅で学習を開始しており、パンディタの号を持つ父の教育熱心

さを知ることができよう。上記の史料を見ると、この段階での教育とは、チベット語の読み書きという学問の初歩だけでなく、幼いテンジンペンジョルに対するしつけを行う目的も含んでいたことがわかる。18世紀前半のチベット王・ポラネーも、テンジンペンジョルと同様に、自宅に老師匠を招き、兄弟とともに経文の暗誦やチベット語の読み書きなど学問の基礎を学んでいる (MBTJ:102)。一方、18世紀のカロン・ツェリンワンギェルは、セラ se ra 寺の僧侶の親族から教育を受けている⁽¹¹⁾。いずれの場合も、幼年期から学識ある官吏や僧侶が師についたのは、この時期の教育が学問の基礎を築くだけでなく、人間形成の場としても重視されていたからと考えられる。

テンジンペンジョルは、11歳になり本格的に学科を学ぶ段階になると、それまでと同様に師を自宅に招く家庭内私塾の形態ではあるが、より独立心を養う形で教育を受けている。天然痘の流行を避け滞在していたポラ pho la の地において、セラ寺のパティ spa ti・ゲシェ dge bshes⁽¹²⁾ とトゥンイクのラブテンドルジェ rab brtan rdo rje の指導の下で、親元から離れ、数名の学友と一軒家で共同生活を送りながら学科を学んだ (DPN:170)。一人っ子の彼は、ともに授業を受ける兄弟がいなかったため、使用人の子弟が学友として招かれたと考えられる。親元から離れて独立した生活を送ったのは、両親から甘やかされて育った彼の自立精神を鍛錬するために取られた措置であったと言えよう。1週間に一度の休みには、母親や親戚の元を訪れることも認められている。ラサに戻った後も、学友とともに自宅での学習を続けた。

こうした家庭内私塾は、テンジンペンジョルの息子ミンギェルソナムペンジョル mi 'gyur bsod nams dpal 'byor の時代になると、より規模が大きなものに発展している。テンジンペンジョルは、メトクケツァル me tog skyed tshal の別荘に長期滞在していた際、自分の息子や従者の息子ら内外 10 人余りの学生のために、学識と人望のある僧侶を教師として招き、別荘のそばに小規模な学校 slob grwa を開いて学問の初歩を施した (DPN:683-684)。ラサの自宅でも、同様の学校を開いている (DPN:1074)。外部の学生も通うこの学校は、テンジンペンジョルの学んだ家庭内私塾よりも一段と規模が拡大したものである。こうした自宅に付設した小規模の学校が、さらに規模を拡大していき、20世紀前半のラサやシガツェなどの都市部に存在した、政府のトゥンイクや僧官らが初等教育を施す通学型の私立学校へと発展していったと推測できるのである。

(3) ミンドゥルリン寺と貴族子弟教育

テンジンペンジョルの師パティ・ゲシェが逝去し、新たな教育方法が模索された際、テンジンペンジョルの母リンチェンキゾムは、彼女の父ツェリンワンギェルや夫の公パンディタが学んだニンマ派 rnying ma ba⁽¹³⁾ の僧院であるミンドゥルリン smin grol gling 寺での学習を息子に薦めている (DPN:178)。

チベットでは、仏・法・僧の三宝をあらゆる学問の根本とする、仏教と深く結び付いた教育が行われていた（青木 1969：169）。したがって、教育の中心地は寺院であり、担い手の中心は僧侶であった。寺院は、宗教活動以外にも、大五明⁽¹⁴⁾ や小五明⁽¹⁵⁾ などの学問を教授する高等学府でもあったのである。ロカ lho kha（山南）地方にあるニンマ派二大寺院の一つミンドゥルリン寺は、1676 年（康熙 15）年、テルトン gter ston（埋蔵経典発掘者）のテルダクリンパ gter bdag gling pa によって創設され、彼を師と仰ぐダライラマ 5 世ロサンギャツォ blo bzang rgya mtsho⁽¹⁶⁾ と摂政サンギェーギャツォ sangs rgyas rgya mtsho の後援を受けて繁栄した寺院である。声明（言語学）や暦学などの学科や、文字・書法の優美さで有名であり⁽¹⁷⁾、その高い学問水準から「知識の大海の生じる地」（MBTJ：154）と称された。ダライラマ 7 世以前の時代には、同寺は貴族子弟の教育の一部を担う役割を持ち、僧院内に文化を専門的に学ぶクラスを設けていたとされる（多傑才旦 1996：355）。暦学など生活に結びついた学問は、俗人にも必要とされる科目であり、貴族子弟らはより高度で専門的な知識を得るため同寺で学んだということができよう。

その一人ポラネーは、1707（康熙 46）年に叔父のグンドゥル dgra 'dul とともにミンドゥルリン寺へ赴き、当時最高の学者の一人であるテルダクリンパの弟ロチェン lo chen（大訳師）・ダルマシュリー dharma shr'i を師と仰ぎ、学業に勤しんだ。ポラネー以外にも、ツェリンワンギェルや公バンディタなど、18 世紀のチベット政界で活躍した人物は、いずれも 18 世紀前半にこのミンドゥルリン寺で教育を受けており（TRBG：234；DPN：31）、実際に該寺が貴族子弟の学び舎として機能していたことを確認することができる。

ポラネーがミンドゥルリン寺で学んだ 18 世紀初頭、チベットの政治は転換期を迎えていた。ニンマ派に傾倒する摂政サンギェーギャツォは、1682（康熙 21）年のダライラマ 5 世の死を、ミンドゥルリン寺のテルダクリンパの協力で 15 年間隠匿し、ダライラマ 6 世を同派の旧家から選んだ（山口 1987 下：322）。摂政サンギェーギャツォと対立したホシヨト・モンゴルのラサン・ハーンは、1705（康熙 44）年に彼を殺害し、政権を掌握した。その後、ラサン・ハーンの大臣ソダタイジは、ミンドゥルリン寺で学んでいたポラネーに対して、次のような提言を行っている。

gang khyod skyes rabs snga ma rgyal po dga' ldan du gyur pa de'i tshe zhwa ser cod pan 'chang ba'i bstan pa la lhag par bya ba byas shing/rgyal ba 'jam dpal snying po la gcig tu dad pa'i phul chen po dang ldan pa yin na/da yang gsang sngags rnying ma'i bla ma slob dpon la brten te/de'i dgon gnas su 'dug pa nges par gnas ma yin pas phyir ldog cig (MBTJ：149)

あなたが前世にガンデン（ガンデンツェワン）であった時、ゲルク派の教えのために特別に行動し、かつ勝者文殊金剛を一心に信仰した殊勝な者であった。なのに今、ニンマ派の密教のラマ（ダルマシュリー）に帰依して、その寺院（ミンドゥルリン寺）に住むのは、まことに不適切であるので、戻ってきなさい。

ソダタイジは、ゲルク dge lugs 派⁽¹⁸⁾の護持者グシ・ハーンの孫であり、対ラダック戦でゲルク派の護持のために命を落としたガンデンツェワンの転生者であるポラネーが、ニンマ派寺院のミンドゥルリン寺で勉強すべきでない、強く非難していることがわかる。この発言の背景には、ゲルク派を護持するラサン・ハーンが、庶民に影響力の強いニンマ派を強く警戒していたという事情があった。時の権力集団の反対を受けたポラネーは、同寺での学業を断念せざるを得ず、ポラの実家に戻った後、ラサン・ハーン政権の官僚となったのであった。

以後、ゲルク派の護持者を称するホショト・モンゴル、ジュンガール、清朝との間のダライラマ6世の廃位と7世の擁立を巡る争いと並行して、彼らのニンマ派に対する弾圧が続いた。ジュンガールは、1717（康熙56）年にチベットを侵略した際、風紀の紊乱のもとになるという理由でニンマ派を弾圧し、ミンドゥルリン寺をはじめとする同派の僧院を破壊した。1720（康熙59）年にジュンガールを駆逐しダライラマ7世を擁立した清朝も、ニンマ派寺院・僧侶の改宗すなわちニンマ派撲滅を意図とする指示を出している（MBTJ:482-484）。山口瑞鳳氏は、この指示は、反ニンマ派のアムド a mdo（青海）地方のゲルク派学匠たちの意を汲んだ行動であったと指摘する（山口1987下:322）。確立した教義体系を持つゲルク派およびゲルク派護持勢力にとって、民間信仰と結びつき呪術的側面も取り込むニンマ派は、ゲルク派政権の安定を揺るがす危険な存在に映ったと考えられよう。ダライラマ5世がニンマ派を庇護したことに対する反動とも見ることができる。

しかし、ミンドゥルリン寺の学徒であったポラネーが1728（雍正6）年に政権を掌握すると、ニンマ派弾圧政策は解かれ、同寺は復興した。1730年代、ポラネーは公パンディタをミンドゥルリン寺に送り教育を受けさせており、ポラネーの庇護の下で同寺が復興し、貴族子弟の教育の場として再び機能していた様子を知ることができる（DPN:31）。

18世紀後半に入ると、ミンドゥルリン寺と貴族子弟の関係に異なる形を見出すことができる。

先述のとおり、テンジンベンジョルは母親からミンドゥルリン寺での学習を勧められた。しかし、溺愛されて育った一人っ子の彼は親元から離れたがらず、公パンディタとその夫人デンドルマも手元から手放すことに難色を示したので、代わりにミンドゥルリン寺で公パンディタの師を務めた老僧チョーゾンパ chos rdzong pa を新たな師として自宅に招き、自宅での学習を続けたのであった（DPN:178）。高齢であったチョーゾンパの死後も、同じくミンドゥルリン寺出身の僧侶・ギュルメナムギャル 'gyur med rnam rgyal を招聘し、暦学などの科目を

学んでいる (DPN:284)。このギュルメナムギャルは、様々な貴族家庭を巡回し教授していることから、チョーゾンパのように専属の家庭教師ではなく、特定の科目を一定期間教える契約型の教師であったと考えられる。このように、ミンドゥルリン寺の僧侶は、寺院の外でも貴族子弟の教育に携わっていたのであった。18世紀後半に入り、ゲルク派の護持者である清皇帝の庇護を受けてダライラマ政権は安定し、ニンマ派寺院の弾圧も行われなくなったという社会背景の下、公パディタも息子の教育をニンマ派僧侶に任せることが可能になったということができよう。また、ダライラマ政府付属の僧官育成学校であるツェー rtse・ラプタ slob grwa (学校) の首席教授は、暦学と書法で高い評価を得ているミンドゥルリン寺の僧侶が担当していた (周潤年 2002:12)。ゲルク派政権の官吏育成の場に、ニンマ派であるミンドゥルリン寺の僧侶が参加していたのは、ミンドゥルリン寺の高度な学問が、宗派を超えて高い評価を得ていた証拠であり、より優れた官吏の育成に必要とされたからに他ならない。

テンジンペンジョルは、これらミンドゥルリン寺出身の高い学識を持つ僧侶たちに加えて、さらに大学者を意味するパディタの号を持つ父親や、ダライラマ 8 世の教育係イェシェェルツェン ye shes rgyal mtshan, ロンドル klong rdol ラマ・ガワンロブサン ngag dbang blo bzang にも教えを仰ぐなど (DPN:331, Petech 1973:55-56)、当時の俗人子弟にとって最高水準の教育を受けていたといえることができる。

2. 教育内容

(1) 伝統的学問

俗人の場合、世俗の学問とされる小五明、つまり修辞学 (詩学)、語彙、戯曲、韻律、暦算 (暦学) を中心に学んだとされるが、具体的な内容は明らかでない。そこで、テンジンペンジョルが学んだ内容を検討したところ、以下の 3 種の学問を重点的に学んでいたことが判明した。

第 1 が、チベット語の書法と文法である。チベット貴族にとって多種多様のチベット文の読み書きを自由にこなすことは必須条件であり、ボラネーが学習を始める際、特に文字の筆記に優れた老学者が師に招かれたことからわかるように (MBTJ:47)、文字の読み書きの学習は幼年期から重視されていたのであった。テンジンペンジョルも、幼年期からチベット文字の読み書きを叩き込まれている (DPN:132)。チベット語以外にも、ランチャ⁽¹⁹⁾、ウルドゥー⁽²⁰⁾、グリ、マカダ、ナガラ、ゴーラ、カシミールなどの文字の学習も、教養の一部として必要とされた (DPN:303)。テンジンペンジョルは、さらにネパールやモンゴルの文字も学んでいる。首席カロンの息子である彼は、将来父の役職を継ぎチベット政治を担う立場にあり、未来の政治家として対外関係を視野に入れた教育の一環であったと考えられる。また、文法を学ぶ教科書には、トンミーサンボータ著『三十頌』sum cu pa と『音勢論』rtags kyi 'jug pa が使用された (DPN:245)。

第2が、詩学 *snyan ngag* (修辞学) である。チベットにおいて詩は、情操を養い、物事を解説したり、弁論や著述に精通するのを助け、学者としてさらに高い段階へ進み、物事の軽重を量る秤として、高く評価されている (MBTJ:141-142)。その学習には、古代インドの文学理論書『詩鏡』 *snyan ngag me long* が使用されており、テンジンペンジョルを見ると、35種類の修飾法の意義を記した『詩鏡』第2章を重点的に学んでいる⁽²¹⁾。ポラネーは、詩学に特に精通していたとされるが (MBTJ:141)、テンジンペンジョルも、詩学は最も好んだ学問の一つであったと同時に、彼の作詩への造詣の深さは、周囲に広く認められていた。その評判は、グルカ族のチベット再侵入の後清朝軍に連行された北京で、雍和宮の高僧トンコル *stong 'khor* フトクト主催の宴会に参加した際、特別に詩の披露を求められたり (DPN:694-695)、チベットに帰郷後も、チャンキャ・フトクト *lcang skya ho thog thu* 4世に対して『詩鏡』を教授してほしいとの要請が来るほどであった (DPN:1196)。詩学は、俗人だけでなく、仏教学の密意をより有意義かつ明解に表現する手段として、僧侶の教育でも重視されていたためと言うことができよう。

第3が、暦学 *skar rtsis* である。暦学は、太陽、月、星など天体の分布や運行を算出して暦計算を行い、天候や季節の推算、農作業、宗教儀礼、医療行為など様々な分野に応用される、日常生活に密着した学問である。テンジンペンジョルは、暦学の運算規則と推算方式などの基本知識を記した『日光論』 *rtsis kyi man ngag nyin mör byed pa'i snang ba zhes bya ba bzhuks so* を教科書に用いて、丁酉 (1777)・戊戌 (1778) 両年の天体の運行を詳細に学び、学習成果を周囲に披露している⁽²²⁾。

暦学に基づく占いも身に付けた。ダルマシュリーの著した『ジュンツィー⁽²³⁾の教誡・月光論』 *'byung rtsis man ngag zla ba'i od zer bya ba* に記されているナクツィー *nag rtsis*⁽²⁴⁾ をはじめ、結婚に関するバクツィー *bag rtsis*、葬儀に関するシツィー *shi rtsis* などに加えて、インド由来のヤンチャル *dbyangs 'char*⁽²⁵⁾ など、必修とされた占いを学んでいる。

以上のように、テンジンペンジョルは数ある学問のなかでも、チベット語の書法・文法と詩学、暦学という小五明に属する学科を中心に学んでおり、ポラネーの受けた教育内容と比較しても大きな差異はない。なぜなら、これらの学問はツェリンワンギェルが「俗人の貴族子弟として伝統的かつ最低限の教養であった」 (MBTJ:141) と評するように、決して特別な内容ではなく、当時の貴族子弟が学ぶべき最低限の基礎的学問であったためということができよう。さらにテンジンペンジョルは、大五明の一つ・声明学 (言語学) と小五明の韻律学に関する指導を受けたことがないので、『詩鏡』の根本的な文意をはっきり解釈できないと述べ、大学者を意味するパンディタの号を持つ父の息子として、自らの学識の浅さを恥じている (DPN:1196)。教養ある人物と認められるには、上記の学問に加えて、さらに大五明・小五明の他の分野も総合的に習得する必要があったと考えられるのである。

(2) 武芸の習得

また、俗人貴族子弟は、学問の他に武芸の習得も奨励された。テンジンペンジョルは、上記の学業に勤しむ日々を送っていたが、15日に一度の休暇には遊ぶことが許可されていた。しかし、ただ遊んでいたわけではない。

dbyar ston kyi dus yin na rags gling stod smad dang/nor bu gling ga sogs kyi chu
'gram du rdo rje nor bu sogs lus rtsal che ba'i zla bo khag nas slob dpon bgyis te pho
rtsal sna dgu'i gras kyi mda' rdo mchongs gsum dang/bang rkyaal sbo gsum sogs
kyis rtsed 'jo'i go chod sbyong brdar dang/dgun dpyid gnyis kyi ring mtshams re
rdo ring du bsdad pa'i mig mang/sha tha ra/sbag 'grig sogs rtsed mo'i rnam grangs
rigs dang/skabs mtshams bye rags nor gling gi brgyud sogs la phyin te rta rgyugs
pa'i zhar byung la mda' dang me mad'i 'phrul 'khor 'phen pas zhar 'phen du grags
pa'i rtsal sbyong byed 'jug (DPN:182)

夏・秋の季節には、セラ周辺の砂地やノルプリンカなどの河岸において、ドルジェノルブなど運動能力に優れた友達の中から師を出して、男子の9種の技能⁽²⁶⁾の類である矢の射的、投石、跳躍の3つや、疾走、遊泳、相撲の3つなどによる演武訓練を行い、冬と春の期間には、ドリンの自宅にいて、将棋、シャダラ（インド将棋）、麻雀などの遊芸の種類を「行い」、時にはセラ寺周辺の砂地やノルプリンカなどを通して馬を走らせるついでに、矢や銃で的を射たりしたので、「ついでのやぶさめ」と言われた武芸を練習する。

勉強の余暇に遊ぶ際にも、身体を鍛錬し、射的や馬術などの武術訓練を行っていたことがわかる。官僚になると、必ず一回は競馬に出なくてはならず、その準備のためにも、日々馬術の訓練が行われたのであった。ポラネーは、年少時より弓矢が得意で、叔父とともに五種類の射技、武芸に秀でていたとされる (MBTJ:58)。ポラネーは、ラサン・ハーン主催の武術試合において、射的、馬上の射的、火縄銃など全ての項目で突出した能力を発揮してラサン・ハーンの注目を引き、後に寵臣となる契機を生んだ (MBTJ:195)。18世紀前半の数々の戦乱をくぐりぬけ、チベット政治の頂点に立ったポラネーは、こうした「武」の部分が強調されることが多い。一方、平和なテンジンペンジョルの時代でも、武術訓練や身体の鍛錬は必須であった。

屋外で運動ができない冬と春には、自宅で将棋などのゲームを行っており、チベット貴族の教養として、「遊び」の習得も不可欠の要素であったということができよう。また、音楽や舞踊も小五明の一つとして重視されていた。テンジンペンジョルは、毎昼食後、自宅に招いた政府の舞踏団員たちから楽器、歌舞、民間歌、舞踏などの教授を受けた (DPN:182)。彼は、音

楽に対する造詣が深く、北京から揚琴、笙、横笛など中国の楽器を持ち帰り、チベット音楽に楽器の合奏という方法を導入し、チベットの伝統音楽・歌舞に大きな影響を与えたとされている（嘉雍群培 2002）。

こうしてテンジンペンジョルは、伝統的学問に加えて、武術や遊び、音楽や舞踏などの武芸も身につけ、文武両道を目指して教養を積んでいたのであった。

3. 俗人官僚になるまでの道のり

(1) ツーカン・ラプタ

ツーカン rtsis khang・ラプタは、ダライラマ政府の財政や俗官の人事管理を行う機構ツーカンに附属した官立学校である。1751年にダライラマ7世の親政が始まり内閣が再構成された際、その政治体制を支える俗官を育成するために正式に創設され、貴族子弟のみが入学することができた。貴族子弟は、まずツーカン・ラプタで政治の実務を学んでから、官職に就くのが通例のコースであったとされている。内閣の一機構としてのツーカンは、17世紀のダライラマ5世の時代から存在していた（曾国慶 2004：160，朱解琳 1990：119）。ポラネーやツェリンワンギェルもツーカンで財務を学んでおり（DPN：246）、正式にラプタが発足する以前から、同所が貴族子弟が実務を学ぶ場として機能していたことを確認することができる。従来の研究でも、ダライラマ政府の官立学校であるツーカン・ラプタに関する記述は存在するが、いつの時代のものか明記されておらず、具体的なものでもない⁽²⁷⁾。そこで本章では、テンジンペンジョルの事例を元に、18世紀後半のツーカン・ラプタの実態と貴族子弟との関係について考察を行う。

テンジンペンジョルは、未来の官僚として政府の実務を身につけるべくツーカン・ラプタで学んだ。しかし、彼がツーカン・ラプタに入学した時、公の爵位を持つ貴族や、カロンなど高級官僚の貴族の子弟がツーカン・ラプタで学ぶことは稀であり、全学生のなかで1、2人しかいなかった（DPN：245）。当時は、官職の父子相続という慣習に基づき、高官の息子はそのまま親の官職を継ぐことができたので⁽²⁸⁾、特にツーカン・ラプタで実務を学び経験を積む必要はないと考えられていたのではないだろうか。従来の研究では、貴族子弟の任官には、ツーカン・ラプタへの入学が必須であったと言われてきたが⁽²⁹⁾、テンジンペンジョルの時代には、そのような条件は存在しなかったということができる。

しかし彼の父である公パンディタは、貴族子弟がツーカンで学ぶことについて、次のように言及している。

bla chen gyi sku skye grwa pa grwa tshang du slob gnyer mdzad dus dang/mi drag
gi phru gu slob grwa dang rtsis khang bcas la yon tan slob 'jug pa gnyis phyogs

mtshungs par las (DPN : 246)

高僧の化身僧が僧院の学堂で研究を行うのと、貴族の子が学校とツィーカンに知識を学びに行くという二つは同じである。

公パンディタは、高僧の化身僧が僧院の学堂で立場にふさわしい教育を受けるのと同様に、貴族子弟がツィーカンで学ぶことは当然行うべき事であるとみなし、当時の風潮とは逆に、息子のテンジンベンジョルをツィーカン・ラプタに入学させたのであった。

さらに、公パンディタは、当時のツィーカン・ラプタの内情について、次のような苦言を呈している。

sne 'go yod rigs nas phugs kyi lam la ma bsams par 'phral gyi mthong bzos mdzes lam kho na gtsor 'don byas gshis/so sor dgos pa'i yon tan mi 'jags par/mi dgos pa'i grwa pa grwa tshang khag dang/gzhung las khungs bcas kyi sgrig srol la gnod cing mig ltos ngan pa sbyor 'jags byed pa zhig 'dug stabs/de snga phan mi drag gi phru gu rtsis khang 'grims mi byings nas ci 'dra byed lam du yod rung/①'di ga'i o lor zla bo rgan pa gcig mnyam 'gros kysis mi gtong ka med yong 'dug pa las/gzhan ma rtsis phrug byings des 'gro'i 'gro bzo sdod mkhas thog rtsis dpon rtsis pa bcas la gus 'dud sogs snyoms chung dma' sa gang zin gyis phyin chad nas las khungs sgrig srol dang/slad lam la phan pa byed dgos (DPN : 246)

指導者のたぐいが将来を考えずに、目の前の美しい褒美の品にただ重きを置いたため、それぞれに必要な知識を覚えずに、不必要に僧の各学堂と政府の機構などの規律・規則を損なって、一つの悪い模範となっている時、以前、貴族の子で、学ぶためにツィーカンへ入った全ての人が、どんな風にしたとしても、①この子供（テンジンベンジョル）には年長の介助者を一緒に送らざるを得ない。よって、その他の全てのツィーカンの学生は、善良になって規則に従う上に、ツィーボン、ツィーパ rtsis pa（ツィーカンの下級官）らに敬意を示すなど、自らの小ささと地位の低さを十分に心にとめて、これからの機構の規律と規則と、今後の道に益あってほしい。

公パンディタは、本来指導者として学生たちに指針を示すべきツィーボンやツィーパたちの墮落ぶりを指摘し、学生の側もツィーボンらに敬意を払わず、傍若無人に振る舞っている実態に、苦言を呈したのであった。本来、教師の下で平等であるべき学生が、家の勢力を背景に周

困から過度に奉られ、教師に対する礼を失い、大きな態度でふるまってツィーカン・ラプタの規律を乱していたのである。このように、当時のツィーカン・ラプタは風紀が乱れ、学習の場として好ましくない状態であったので、公パンディタは息子に悪影響が及ぶことを危惧し、特別に従者をつけてその学習生活を保護することにしたのであった（下線部①）。さらに、テンジンペンジョルのツィーカンにおける師には、厳格で有名なツィーパ・ロンユルラバ rong yul lha ba が就き（DPN:247）、彼が周囲の環境に惑わされることなく、学問に打ち込める環境作りが行われた。

ツィーカン・ラプタでは、書法と算術を中心に、文法や正字法、政府倉庫の在庫収支帳の閲覧、収支帳目の作成、公文・報告・指示・訴訟・判決など各種の公文書の書き方など、政府の実務に関連する学習が行われたが、なかでも算術と公文書の書き方は、官員として政治に携わるために必ず把握すべき基本知識・技能であった。また、不定期に行われた試験の成績優秀者に対しては、ツィーカンやその他の政府機関で公文書の写しや計算などの手伝いなどの実地訓練を行わせ、さらに実力を付けさせた（周愛明 2002:40）。こうした各政府機関での実習は、官界の礼儀を学び、仕事に慣れる意味合いも含んでいたといえる。ツィーカン・ラプタでの学習は、将来官僚となった際に非常に役に立つものであったが、テンジンペンジョル自身は、一年間の在学期間のうち、金銀の度量などの計算や比価の換算法などの計算法は習得したが、政府倉庫の収支などの実務の詳細については、晩年になってもよくわからないままだと述べており（DPN:248）、財務については、あまり熱心には学習を行わなかった様子である。

周愛明氏は、ツィーカン・ラプタでの在学期間は通常1年から5年だが、卒業試験に合格するか否かで期間も変化し、卒業試験に合格することで任官が可能になったと述べる（周愛明 2002:36）。しかし、テンジンペンジョルや息子のミンドゥルソナムペンジョルの在籍期間は1年と短く、入学試験も卒業試験も受けていない（DPN:246, 1099）。18世紀後半のツィーカン・ラプタは、貴族子弟が任官するために必須の学習機関ではなく、あくまでも実務を身につけるための場に過ぎなかったと考えられるのである。

(2) 内閣の中核での学習と任官試験

テンジンペンジョルは、ツィーカン・ラプタの他にも、さらに内閣の中核 bka' shag steng lte ba で実習を積んでから、官吏に就いている。

1779（乾隆44）年、カム khams（東チベット）のサンゲン sa ngan（三艾，三暗）でダライラマ政府官僚の荷駄が現地民に襲撃される事件が発生し、清朝とダライラマ政府の双方から軍隊を派遣することになり、公パンディタはチベット側の総指揮官として現地へ赴いた（DPN:408、『高宗実録』巻1095, 13-14葉，巻1103, 18-21葉）。当時、テンジンペンジョルには特定の師がおらず父の下で学んでいたため、公パンディタが出兵した場合、学業が続けられなかつ

た。そこで、通常の学習と公務の双方を学ぶために、内閣のいずれかの機構に所属し学習することが検討されたのである (DPN:379)。

当時、内閣の俗官機構のなかで学生をとっていたのは、先述のツィーカンと内閣の日常事務を処理する秘書機構カシャ・シヨ bka' shag shod の2ヶ所であった。しかし、両所は仕事も学生も多く、当時優れた教師もいなかったため、落ち着いて学習するには好ましくないとされた。そこで候補に挙がったのが、内閣の中枢である。同所は、ドンニェル mgron gnyer (接客官)、トゥンイク、ガパ 'gag pa (侍衛) 以外にそれまで学生を取る習慣はなかったが、テンジンペンジョルは特別にダライラマと摂政の認可を受け、入ることになった。公パンディタの息子のテンジンペンジョルは、将来のチベット政治を担う存在として周囲から期待されていたことも、内閣の中枢に所属して学ぶことを特別に許されたと考えられる。また、内閣の中枢を担うカロンたち、例えばテンジンペンジョルの母方の親戚ソナムワンギェル bsod nams dbang rgyal⁽³⁰⁾ やラマカロン bla ma bka' blon⁽³¹⁾ のケルサンナムギェル skal bzang rnam rgyal は、公パンディタと懇意の人物であり (DPN:380)、彼の同所での学習を後押ししたのは想像に難くない。こうした経緯から、テンジンペンジョルは正式の官吏ではないが、イクトゥク yig phrug (見習い秘書) として、ドンニェルやトゥンイクらの列に加わったのであった。

以上のように、テンジンペンジョルは主に小五明に基づく学問と武芸を身につけ、ツィーカン・ラプタで官吏としての実務を学び、内閣の中枢でも特別に実習を行った後、1781年政府の俗官となり、トゥンイクの職を得た (DPN:426、次頁のテンジンペンジョル学習年表を参照)。通常、官吏の任命は正月の数日間のみ行われたが、テンジンペンジョルの場合は、ダライラマ8世が清朝から金冊と金印を得たことを祝う宴会の席で、特別に行われたものであった⁽³²⁾。

さらに就任式の後、同時に官職に就いた新任官吏6名とともに、ツィーボンによる能力試験を受けている (DPN:426-478)。

試験は、まず午前中に筆記と算術の2科目が行われた。筆記試験では、ダライラマと摂政、カロンたちの長寿・事業・繁栄の3つの賛詞を、チベット語の3種の字体とランチャ字など多種多様な字体で記して提出した。これは書法のみならず、詩学や文法の知識も合わせて量る試験であった。算術では、金、銀、穀物、バター、絨毯などに使用する尺度の分数計算法、比価計算法を点棒と書算板を用いて算出することが要求され、官吏としての実務能力が試された。午後の試験では、駆け足と射的という武術に関する試験が行われた。これらの試験は、チベット貴族としての文武能力と、官僚としての実務能力の双方を試す試験であったとすることができよう。

これら3つの試験の結果を総合して順位が決定され、結果がダライラマ、摂政、カロンたちに伝えられた。テンジンペンジョルは、駆け足と射的の試験では首席であったが、書法と算術

チベット俗人官僚の子弟教育

では第3位にしか過ぎなかった。しかし、彼が首席カロン・公パンディタの息子であるという点が考慮され、全ての試験で首席という報告がなされたのであった (DPN:428)。

この能力試験は、就任式の後に行われていることからわかるように、任官そのものを左右する試験ではない。順位も、上記の如く人物の家柄を考慮して決定されており、決して公平な試験ではなかった。この試験は、父子世襲の慣習に基づき官吏となる貴族子弟が、任官までにどれくらい学問や武芸、実務の教養を積んだか、その習得度合を量る手段であり、形式的なものに過ぎなかったとすることができる。

また、この試験は、ボラネーやツェリンワンギェルの時代には存在せず、テンジンベンジョルの息子ミンギェルソナムベンジョルが任官した際にも行われていない⁽³³⁾。18世紀後半の一時期のみ実施された試験であった。その理由には、この試験は形式的なものであり、わざわざ任官後に行う意義が乏しかったからではないだろうか。ツィーカン・ラプタを卒業する際に任官試験を兼ねた学科試験が行われ、武術試験は任官の後、数年に一度まとめて実施されたとの

テンジンベンジョル学習年表

年 齢	内 容 1	内 容 2	師	備 考
5 歳	勉強を開始	経文の暗唱, 文字の読み書き	シタルドルジェ (トゥンイク)	ラサの自宅
11 歳	本格的な学問を開始	チベット語の書法・文法, 詩学, 暦学, 占い, 武芸, モンゴル語	初期: パティ・ゲシエ, ラブテンドルジェ (トゥンイク)	ボラで数名の学友と合宿生活→ラサの自宅
?			後期: チョーゾンパ (ミンドゥルリン僧侶)→ギェルメナムギャル (ミンドゥルリン僧侶)	
18 歳?	ツィーカン・ラプタに入学	書法, 算術, 文法, 正字法, 財務や公文書の書き方, 公文書の写しや計算などの実地訓練	ロンユルハバ (ツィーボン)	1年間在籍
19 歳	内閣の中核で学習	見習い秘書 (イクトゥク) として実務を学ぶ		
21 歳	トゥンイクに就任	任官後ツィーボンによる能力試験→筆記, 算術, 武術		書法と算術で3位, 武術で首席→報告では全てが首席
23 歳	カロンに就任			父の公パンディタの後任
28 歳	首席カロンに就任			同年に第1次グルカ戦争が勃発

※bstan 'dzin dpal 'byor, *rdo ring paNDi ta'i rnam thar* (四川民族出版社, 1986年, 成都) を基に作成

記述もあるが(多傑才旦 1991: 50)、ツィーカン・ラプタでの学習が任官の必須項目になって以降のものと考えられる。

4. 独自の教育 — モンゴル語と対清朝関係 —

テンジンペンジョルの受けた教育のなかで、注目したいものがある。それはモンゴル語教育である。彼が成長した18世紀後半という時代は、モンゴル諸部のチベットに対する政治的影響力は既に失われており、清朝との関係のなかでは、モンゴル語の需用は低下したかのようにみえる。テンジンペンジョルは、なぜモンゴル語を学んだのであろうか。

少年期、テンジンペンジョルはまず父である公パンディタからモンゴル語の手ほどきを受けた(DPN: 302-303)。公パンディタは、モンゴル語の会話と読み書きの双方に精通しており、息子は父を真のモンゴル人のようであったと評している(DPN: 208)。さらに、ラサの自宅にモンゴル語専門の家庭教師を招き、学科の勉強の合間に数ヶ月間に亘って会話と読み書きを学んだ(DPN: 302-303)。彼のモンゴル語会話力は、第2次グルカ戦争で北京に連行される途中モンゴル地域を通過した際、通訳の必要はなかったと述べていることから(DPN: 208)、少なくとも意思の疎通に不自由のない域に達していたといえることができる。

こうして習得したテンジンペンジョルのモンゴル語能力は、衆知のものであった。1781年、テンジンペンジョルが政府のトゥンイクに就任した時、摂政ガワンツルティム ngag dbang tshul khrimis が彼に与えた訓戒を見てみよう。

gsol ston grol nas gzim chung du sger mjal skabs srid skyong dga' ldan shri ge thu
er te ni no min han rin po che nas sngon yod rig gnas kyi yon tan dang po sog skad
bcas ma brjed pa'i thog zhar byung rgya nag dang/manydzu'i skad rigs bslab gang
thub dang lhag don gzhung las la goms 'dris che ba no yon gung paNDi ta dang/
bka' drung bya tshang pa/rtsis pa shar sgo ba gsum la mig ltos kyis hur bskyed
byed dgos song rjes brtse'i bka' slob mang du bstsal/(DPN: 426)

[ポタラ宮での任官式の後に行われた] 宴会がお開きになってから、寝室で私的に謁見した時、摂政ガルダンシレトゥ・エルデニ・ノミンハン・リンポチェ(ガワンツルティム)は、「元々ある学科の知識を第一に、モンゴル語も忘れないのに加えて、ついでに漢語(中国語)と滿州語などもできる限り教わり、残りの事は、政府の仕事に大いに熟練するノヤン公パンディタとカトウンのチャツァンバ、ツィーパのシャルゴバの3人を模範として努力しなければならない」など、慈悲あるたくさんの訓戒を私にお与えになった。

ガワンツルティムは、テンジンペンジョルに対して、チベットの伝統的学問の知識を第一としながらも、モンゴル語能力の維持ならびに漢語と満州語の学習を奨励している。つまり、テンジンペンジョルがモンゴル語をできることを知っていた上で発言していることがわかる。このモンゴル語ならびに漢語と満州語の習得は、明らかに清朝との政治的関係を意識してなされた示唆と言えよう。テンジンペンジョルが将来のチベット政治を担う存在であったことを鑑みると、ガワンツルティムは、テンジンペンジョルが既得のモンゴル語能力を維持し、さらに漢語・満州語を身につけ、今後の対清朝関係で大いに活躍することを期待していたのではないだろうか。

モンゴル語の奨励の背景には、清朝の官吏登用政策も影響していたと考えられる。村上信明氏は、乾隆40年代後半以降、清朝は蒙古旗人を藩部のモンゴル人・チベット人を管轄する駐防官として積極的に用いたことを指摘する(村上2003, 2004)。蒙古旗人のモンゴル語能力の低下のなかで、乾隆帝はモンゴル語に通曉する蒙古旗人の育成を行い、チベット事務を処理する官吏に登用していたのである。実際、1780(乾隆45)から1790(乾隆55)年までに登用された駐蔵大臣11人のうち、8人を蒙古旗人が占めている⁽⁸⁴⁾。裏を返せば、テンジンペンジョルが官吏に就いた1781年前後は、モンゴル語を話す蒙古旗人官僚との交渉の上で、よりモンゴル語の必要性が増していた時期であり、ガワンツルティムもテンジンペンジョルのモンゴル語能力に期待していたと言えるのである。例えば、1783年に着任した蒙古旗人の駐蔵大臣慶麟は、緊急の用件を伝える際に通訳が不在であったため、テンジンペンジョルにモンゴル語で話しかけ、テンジンペンジョルも慶麟の話す内容を理解していた(DPN:466-467)。公式の間では正式の通訳を介した交渉が行われていたと推測されるが、非公式かつ緊急の場合には、モンゴル語が共通言語として使用されていた事例である。

また乾隆帝は、慶麟の後任である舒濂を、満洲旗人でありモンゴル語は話せないけれども、軍機処での実務経験がありチベット事務に通じている、という理由で駐蔵大臣に任命している(村上2003:34-35)。一方、乾隆58年に和寧を駐蔵幫辦大臣に任命した理由には、彼が蒙古旗人であり、モンゴル語を解することを挙げている(村上2007:29)。裏を返せば、二度の対ネパール戦争(第1次・第2次グルカ戦争)が勃発したこの時期、乾隆帝は戦争の事後処理を含めた対チベット事務を円滑に進めるために、駐蔵大臣にはチベットとの共通言語であるモンゴル語ができる者、つまり蒙古旗人が好ましいと考えていたということができよう。清朝側も、モンゴル語を共通言語と認識していたのである。

通訳なしで直接に意思の疎通が可能かどうかは、非常時の政治的局面でより大きな問題となった。1788年にネパールのグルカ族がチベットへ侵入した際、清朝は、四川提督成徳、成都將軍鄂輝が率いる援軍をチベットに派遣した⁽⁸⁵⁾。彼らについて、テンジンペンジョルは次のように評している。

①lcang jun dang/thi'i thus mtshon rgya dpon gzhan mas bod skad lta ci sog skad tsam yang shes kyis mi 'dug stabs ②nged rang nas kyang rgya skad tshul ldan ma shes pa'i babs kyis las don skor sogs gang cir thung si brgyud dgos sogs 'gor gzhi dang he bag ci che yong gi 'dug rung/(DPN: 579)

①成都將軍額輝と四川提督成徳をはじめとする他の中国人官吏が、チベット語ばかりでなくモンゴル語すらも知らず、②私自身も正しい漢語を知らない状況なので、事務の類など全てにおいて通訳を通さなければならないことにより、時間がかかり、意見の相違が大きくなっていたが（省略）。

下線部①を見ると、テンジンベンジョルは、モンゴル語を清朝とチベット間の共通言語として認識していたが、今回派遣された清朝官吏は、チベット語はもとより、モンゴル語もできなかったことがわかる。チベットに派遣された額輝と成徳はいずれも満洲旗人であり、モンゴル語ができなかったのであろう。したがって通訳抜きでは意見の交換ができず、対グルカ作戦に支障をきたす原因になっていたことを、テンジンベンジョルは指摘しているのであった。その一方で、チベット語が堪能であった欽差大臣巴忠⁽³⁶⁾や総兵張芝元⁽³⁷⁾など一部の清朝官僚が、チベット側と密接な関係を築くことができたのは言うまでもない。またテンジンベンジョルは、19世紀はじめの駐蔵大臣策拔克について「ツェのアンバン（策拔克）は性格が温厚で考えが良いだけでなく、多くの漢人官吏の長とは異なり生まれがモンゴル人なので、指示の趣意を尋ねるのにも通訳を通す必要がなく、意志の相違は小さかった」（DPN:1237-1238）と記しており、テンジンベンジョルと蒙古旗人の策拔克は通訳を通さずにモンゴル語で直接やり取りをしていたことがわかる。両者のモンゴル語能力が、チベット・清朝間の速やかなる事務処理を後押ししたといえるだろう。

先に述べたように、任官の際にガワンツルティムから漢語の学習を奨励されていたテンジンベンジョルであるが、下線部②を見ると、漢語はあまり理解できなかった様子である。第2次グルカ戦争の際に、連行先の北京で乾隆帝と非公式に謁見し、乾隆帝から漢語とモンゴル語ができるか尋ねられた時も、テンジンベンジョルは、漢語はいくつか単語は知っているが、意思の疎通はできないと語っている⁽³⁸⁾。一方、モンゴル語は理解できる旨を述べたところ、乾隆帝は彼に対して通訳を介さず、モンゴル語で直接諭旨を下した⁽³⁹⁾。乾隆帝との面会の場においても、モンゴル語を使って直接交流することができたのである。テンジンベンジョルが受けたモンゴル語教育は、チベット・清朝関係における公的・私的の様々な局面で大いに有益であったといえることができる。

おわりに

以上、テンジンペンジョルが受けた教育、つまりチベット仏教に基づく学問と武芸を身に付け、モンゴル語を習得し、ツィーカン・ラプタや内閣の中樞で実習を行った後、俗人官僚として政府に奉職するまでの道のりを明らかにした。

教育形態を見ると、18世紀のチベットでは、俗人のチベット貴族子弟が本格的に学問を学ぶ際に、寺院で学ぶという選択肢もあれば、僧侶を自宅に招いて学習するという選択肢もあったが、いずれにしてもニンマ派ミンドゥルリン寺の僧侶が貴族子弟の教育に深くかかわっていたことが判明した。また、18世紀後半には、テンジンペンジョルが学んだような、あくまでも家人を対象にした家庭内私塾もあれば、家庭内ではあるがやや規模が拡大し、外部の学生も通う小規模な学校も存在していた。こうした家庭内の小規模な学校が、19世紀に入り、人口の増加や教育対象の拡大などの社会的条件に伴い、20世紀初頭のラサに存在していた僧侶や官吏が教師を務める学校に発展していったと考えられる。

教育内容を見ると、テンジンペンジョルは、幼年期からチベット語の筆記と文法を叩き込まれ、小五明のなかでも詩学、暦学の学科を中心に学び、同時に武芸も身につけている。これらは、ツェリンワンギェルが「俗人の貴族子弟として伝統的かつ最低限の教養」と述べているように、俗人のチベット貴族が身につけるべき基本的な教養であった。こうした伝統教育は、20世紀前半に近代教育が導入されるまで、基本的には変わらないものであったと考えられる。占いや音楽などの分野には、中国文化の影響も見ることができるが、根本となるのはあくまでもチベット仏教に基づいた学問であったということができる。

また、18世紀後半は、俗官育成学校としてのツィーカン・ラプタが正式に成立した時期であったが、当時は父子世襲の慣習に伴い、同校で学び知識をつけなくても政府に奉職することができた。俗官育成機関としてのツィーカン・ラプタの役割はまだ確定していなかったのである。2度の対ネパール戦争後、官職の父子世襲の禁止が明文化され、貴族子弟が俗官になるためにはツィーカン・ラプタでの学習が必須となり、同校の卒業試験に合格して任官するという構図が定形化していく。18世紀後半は、ツィーカン・ラプタが正式に成立し、その役割が確定するまでの過渡期であったということができよう。

さらに、テンジンペンジョルとモンゴル語の関係から、18世紀後半期にモンゴル語はチベット・清朝間の共通言語として認識され、使用されていたことを確認することができた。モンゴル語教育を受けたテンジンペンジョルは、その語学力を清朝との政治的關係において生かすことを周囲から期待され、実際に活用していたのである。しかし、摂政ガワンツルティムが発言しているように、チベット人にとって第一に必要な学問は、あくまでも大五明・小五明に基づく伝統的学問であった。1794（乾隆59）年に駐蔵大臣に就いた松筠は、ラサに漢文学堂を開

いたが（『西藏紀遊』西4, 19葉）、結局根づかなかったのは、チベットにおける「学問」とは、チベット仏教の教えに基づくもの以外の何物でもなかったからと考えられる。つまりモンゴル語をはじめ漢語・満洲語は、清朝との政治的関係を円滑に進めるための「道具」という位置付けでしかなかったのである。

今回は、テンジンペンジョルという一人の事例を挙げたに過ぎず、18世紀後半という時期の特性を探るには、更なる事例の検証が必要である。また19世紀以降、チベットはネパール、イギリス、ロシアなど諸外国からの圧力を受け、18世紀後半のような内外政治がともに安定した時代は終わりを告げる。政治を担う貴族子弟の教育においても、従来の伝統的教育に加えて、より実学的な要素が必要とされてくると推測される。どのような教育が新たに必要とされ、実施されたかについては、今後の課題としたい。

注

- (1) デボンに属する貴族は、18世紀前半のボラネー内閣の後裔であり、ガシ dga 'bzhi, トウン thon, ドカル mdo mkhar, ボラ pha la, ラギャリ lha rgya ri の5家族である (Petech 1973: 15, 50)
- (2) 清朝のチベット運営を扱った代表的な研究として、張永江 2000 を挙げる。清朝の駐チベット代表である駐蔵大臣に関する研究には、呉豊培、曾国慶 1989, 蕭金松 1996 などがある。
- (3) 18世紀後半期間におけるダライラマの一族の婚姻関係と政治との関わりを記したものに、小松原ゆり 2002 がある。
- (4) 主な研究として多傑才旦 1996, 周潤年, 劉洪記 1998 を挙げる。
- (5) 中国における代表的な研究に、朱解琳編著 1990, 多傑才旦 1991, 周愛明 2002 がある。日本では、岡本雅享 1999 のなかにチベット人の教育に関する章がある。
- (6) 荘園の名前からガシとも、ラサの邸宅の名前を取ってドリンとも称される。本稿では、DPNの自称に従いガシと表記する。
- (7) ガシ家とダライラマ 8世, パンチェンラマ 3世, 4世の一族との婚姻関係については、小松原ゆり 2002 を参照。
- (8) 18世紀後半期のカロンの選出と世襲の関係については、小松原ゆり 2010 を参照。
- (9) 周潤年氏はこうした形態を「家庭私塾」と定義している。周潤年 2002 を参照。
- (10) チベットでは、幼児は7歳になると幼児から子供になったと認識され、教育を開始する最も良い時期と考えられていた (Taring 1970: 30, 日本語訳はタリン 1991: 69)。
- (11) ツェリンワンギェルは、幼年期はセラ寺の僧侶でラブジャンパ rab 'byams pa (顕教学部の第13学級に在学する者に対する学位) である母方の伯父, 10歳以降は父親から教育を受けている (TRBG: 233-234)。
- (12) ゲシェとは、顕教の博士号のこと。
- (13) 他の宗派が後伝仏教時代にサンスクリット語から翻訳された聖典を奉じているのに対して、ニンマ派は前伝期に翻訳された聖典を奉じており (立川武蔵, 頼富本宏 1999: 35), 古派とも称される。
- (14) 声明 (言語学), 工巧明 (工芸, 絵画), 医方明 (医学, 薬学), 因明 (論理学), 内明 (仏教学) の5つ。古代インド仏教が僧徒に伝えた学問系態に基づく5大学問であり、チベット文化の基礎とされる。
- (15) 詩詞 (詩学, 修辞学), 語彙, 戯曲, 韻律, 曆算 (曆学) の5つ。大五明と同じくチベット文化の基礎とされ、主に俗人向けの学問とみなされている。

チベット俗人官僚の子弟教育

- (16) グライラマはゲルク派の僧侶だが、グライラマ5世はチベット古来の荒ぶる神々を仏教の守護神に変身させるためニンマ派を保護し、自身もニンマ派の教義の実践者であったことで知られる（立川、頼富 1999：35）。
- (17) 朱解琳 1990：22。20世紀初頭のミンドゥルリン寺も声明（言語学）や小五明が盛んであったと伝わる（多傑才旦 1991：18）。
- (18) ゲルク派は、14世紀後半にツォンカバが開いた宗派で、チベット仏教4大宗派の一つに数えられる。顕教を重視し、顕教を治めた者のみが密教の修行を行うべきことを強調し、厳格な僧院組織を有する。同派はモンゴル布教に成功し、モンゴルの後援を受けたグライラマ5世は、チベットにおける聖俗の最高権威者となった。
- (19) 諸説あるが、チベット語の楷書の原型とされる。
- (20) 諸説あるが、チベット語の草書の原型とされる。
- (21) 父の公バンディタ自らが『詩鏡』第2章を教授し、習得度を量るために毎日試験を行うなど、詩学の学習に重点が置かれていたことがわかる（DPN：178）。
- (22) 丙申（1776年）10月15日の夜の月蝕と同月末の日蝕の解説を、ジョカン lha ldan gtsug lag khang（大昭寺）の回廊の正門の柱に貼り出した（DPN：285-286）。また、翌丁酉年の曆書に関する学習成果を、グライラマ8世とパンチェンラマ3世に献上もしている（DPN：303）。
- (23) 五行算による中国系の占い。木火土金水の五行の関係から時の吉凶を占う。各ツィー rtsis については、山口 1987 上、西脇 2004 を参考にした。
- (24) 五行算に関連する九宮 sme ba dgu や八卦 spar kha など、中国由来の要素を含む占い。
- (25) サンスクリット語の「スヴァローダヤ（母音の出現）」の訳語で、インド系の占い。時間の間隔にそれぞれ特定の一音節を割り当て、自分の名前の最初の音節との関係で吉凶を占う。ホロスコープ占星術の要素も含む。
- (26) 身体（矢を射る、泳ぐ、すばやい身のこなし）、話し方（すらすらとした説明、面白く話す、論争で勝つ）、中身（聡明で頭の回転が速い、落ち着いて耐え忍ぶことができる、言葉が明確で意味が深い）の9種である。
- (27) チベットの教育について書かれた朱解琳 1990、多傑才旦 1991、周愛明 2002、周潤年 2002 のツィーカン・ラプタに関する記述は、時代を明記していないがいずれも20世紀前半の状況をモデルに概説していると思われる。
- (28) 18世紀後半におけるグライラマ政府の内閣を担うカロンの選出と官職の父子継承については、小松原 2010 を参照。
- (29) 俗官はツィーカン・ラプタの卒業生から選ばれるため、任官のためには実質的にツィーカン・ラプタに入学し学ぶことが必要である。多傑才旦 1991：49、朱解琳 1990：22 を参照。
- (30) ドカル家のツェリンワンギェルの孫であり、テンジンベンジョルの従兄弟である。Petech 1973 を参照。
- (31) 1951年以降内閣の4人のカロンのうち1人は僧侶（ラマカロン）が担当していた。ラマカロン設立の経緯については、小松原 2010 を参照。
- (32) DPN：425。乾隆45年10月乙卯に乾隆帝はグライラマ8世に対して金印や金冊を授与する諭旨を出している（『高宗実録』巻1116、17葉）。
- (33) DPN：1099-1100。テンジンベンジョル自身も、DPNを書いた時点（DPNの脱稿は1806年）では任官後の能力試験が既に行われていないことを指摘している（DPN：426）。
- (34) この時期の駐蔵大臣11人を見ると、満洲旗人：3人、蒙古旗人：8人であり、蒙古旗人が圧倒的に多い。一方、乾隆40年代後半より前の時期、1737（乾隆2）年から1779年までの駐蔵大臣34人は、満洲旗人：25人、蒙古旗人：6人、その他：3人と満洲旗人が圧倒的に多い。曾國慶 1999 の附録 清代駐蔵大臣一覧表を参照。
- (35) 『宮中檔乾隆朝奏摺』乾隆53年7月20日李世傑、成徳、仏智奏摺。1788年に勃発した第1次グ

ルカ戦争の全体像については、佐藤長 1986 を参照。

- (36) テンジンベンジョルが幼い頃、巴忠は乾隆帝の命を受けてチベットに滞在し、チベット語会話と読み書きを学んでいたという。よって、巴忠はチベット語に堪能であり、第1次グルカ戦争が勃発し欽差大臣としてチベットに来た際にも、チベット語の通訳や翻訳官は必要なかった (DPN:589)。
- (37) 張芝元は、四川省清溪の出身であり、チベット語に通じていた (『清史稿』巻329, 列伝116)。DPN では、張芝元はカム khams (東チベット) 地方のダルツェンド dar rtse mdo (打箭炉) の生まれであり、チベット語が話せたので通訳がいらなかったと記されている (DPN:579)。
- (38) DPN:415。DPN におけるテンジンベンジョルの北京訪問の記載から当時の清朝宮廷の様子を分析した論文に、李若虹 2006 がある。
- (39) DPN:416。乾隆帝は、1780 (乾隆 45) 年のパンチェンラマ3世との面会に備えてチベット語の日常会話を学んでいたことから (石濱 2001:339)、多少のチベット語はできたと思われる。しかし、日常会話に不自由ないとまではいかないので、テンジンベンジョルに漢語かモンゴル語ができるか尋ねたと考えられる。

参考史料

- DPN: bstan 'dzin dpal 'byor, *rdo ring paNDi ta'i rnam thar*, 四川民族出版社, 1986 年, 成都
- MBTJ: mdo mkhar zhabs drung tshe ring dbang rgyal, *dpal mi'i dbang po'i rtogs pa brjod pa 'jig rten kun tu dga' ba'i gnam zhes bya ba bzhugs so*, 四川民族出版社, 1981 年, 成都
- TRBG: mdo mkhar zhabs drung tshe ring dbang rgyal, *d'irgh'a yurindra dzina'i byung ba brjod pa zol med ngag gi rol mo* (kaH thog tshe dbang nor bu, *rgyal ba'i bstan pa rin po che byang phyogs su 'byung ba'i rtsa lag bod rje lha btsan po'i gdung rabs tshigs nyung don gsal yid kyi me long*, T. Tsepal Taikhang, New Delhi, 1974 に収録)
- 『宮中檔乾隆朝奏摺』: 国立故宫博物院編『宮中檔乾隆朝奏摺』国立故宫博物院, 1982~1988 年, 台北
- 『高宗実録』: 『高宗純皇帝実録』中華書局, 1985~1986 年, 北京
- 『西藏紀遊』: (清) 松筠撰著, 西藏社会科学院西藏漢文文献編輯室『西藏紀遊』全国図書館文献縮微複製中心, 1991 年, 北京
- 『清史稿』: 『清史稿』中華書局, 1976 年, 北京
- 丹津班珠爾著, 湯池安訳『多仁班智達伝 — 噶錫世家紀実』中国蔵学出版社, 1995 年, 北京
- 多卡夏仲・策仁旺傑著, 湯池安訳『頗羅鼎伝』西藏人民出版社, 1988 年, ラサ
- 多喀爾・策仁旺傑著, 周秋有訳, 常風玄校『噶倫伝』西藏人民出版社, 1986 年, ラサ

参考文献

(日本語)

- 青木文教 1969 『西藏』芙蓉書房
- 石濱裕美子 2001 「一七八〇年のパンチェンラマ・乾隆帝会見の本質的意義」『チベット仏教世界の歴史的研究』東方書店, pp.321-361
- 石濱裕美子編著 2004 『チベットを知るための50章』明石書店
- 岡本雅享 1999 『中国の少数民族教育と言語政策』社会評論社
- 片桐宏道 2009 「ダブン考 — ダライラマ政権における「武官」—」『東洋史研究』第68巻第1号, pp.1-29
- 小松原ゆり 2002 「18世紀後半期におけるダライラマの親族 — その政治的役割を中心に —」『明治大学大学院文学研究論集』第17号, pp.39-57
- 2010 「18世紀後半期のカロンから見たチベット・清関係」『内陸アジア史研究』第25号,

pp. 55-73

- 佐藤 長 1986 「第一次グルカ戦争について」『中世チベット史研究』同朋社, pp. 521-596
 多田等観 1942 『チベット』岩波新書
 立川武蔵, 頼富本宏編 1999 『チベット密教』春秋社
 R. D. タリン著, 三浦順子訳 1991 『チベットの娘』中公文庫
 手塚利彰 1995 「ラサン体制(一七〇五—一七二七)の構造とその解体過程について」『鷹陵史学』第21号, pp. 93-126
 西脇正人 2004 「世界を読み解く手かがり — チベットの占い」『チベットを知るための50章』明石書店, pp. 210-215
 村上信明 2003 「乾隆朝中葉以降の藩部統治における蒙古旗人官僚の任用」『史境』47号, pp. 31-50
 ——— 2004 「乾隆40年代後半以降の藩部統治を担当した蒙古旗人官僚」『史峯』第10号, pp. 1-18
 ——— 2007 『清朝の蒙古旗人 その実像と帝国統治における役割』風響社
 山口瑞鳳 1987 『チベット』上下, 東京大学出版会

(中国語)

- 次仁央宗 2005 『西藏貴族世家 1900-1951』中国蔵学出版社, 北京
 多傑才旦 1991 『西藏的教育』中国蔵学出版社, 北京
 多傑才旦主編 1996 『西藏封建農奴制社会形態』中国蔵学出版社, 北京
 嘉雍群培 2002 「多仁・丹增班覺对西藏伝統音楽の影響」『中央民族大学学报』哲学社会科学版, 2002年第1期, pp. 77-82
 頼福順 1984 『乾隆重要戦争之軍需研究』国立故宮博物院, 台湾
 李若虹 2006 「從《多仁家族史》析乾隆朝晚期的清廷」『中国蔵学』2006年第1期, pp. 19-24
 吳豊培, 曾國慶 1989 『清朝駐藏大臣制度的建立与沿革』中国蔵学出版社, 北京
 曾國慶 1999 『清代蔵史研究』西藏人民出版社・齊魯書社, ラサ, 濟南
 ——— 2004 『蔵族歴史・文化』民族出版社, 北京
 張永江 2000 「論清代西藏行政体制的演變及其得点」『清史研究』2000年第3期, pp. 31-43
 ——— 2001 『清代藩部研究 — 以政治變遷為中心』黒龍江教育出版社, ハルビン
 周愛明 2002 『西藏教育』五洲伝播出版社, 北京
 周潤年 2002 『西藏教育五十年』甘肅教育出版社, 蘭州
 周潤年, 劉洪記 1998 『中国蔵族寺院教育』甘肅教育出版社, 蘭州
 朱解琳編著 1990 『蔵族近現代教育史略』青海人民出版社, 西寧

(英語)

- Petech 1973: Petech, L., *Aristocracy and government in Tibet 1728-1959*, Rome, 1973
 Shakabpa 1967: Tsepon W. D. Shakabpa, *Tibet: A political history*, New Heaven, 1967
 Taring 1970: Rinchen Dolma Taring, *Daughter of Tibet*, London, 1970

An Education for Becoming a Lay Official in Tibet:
A Pattern of *Bstan 'dzin dpal 'byor*, the Minister of the Dalai Lama
Government during the Latter Half of the Eighteenth Century

KOMATSUBARA Yuri

The latter half of the eighteenth century was an important era for Tibet because it was during this era that the modern Tibetan political system was established. A number of historical studies are based on Chinese recourses regarding the political structure of the Tibetan government; however, these studies did not pay any attention to the Tibetan officials who shouldered the political, societal, and cultural responsibilities during that era. Therefore, this thesis focuses on *Bstan 'dzin dpal 'byor*, the minister of the Dalai Lama government during the latter half of the eighteenth century, who was born in a noble house and succeeded his father's position as a minister. Based on his biography, I compared his education for becoming a lay official with those of other statesmen. I have elucidated the manner in which one could become a lay official in the Tibetan political system during that era and have garnered greater knowledge regarding Tibetan politics.

The four main results are as follows: First, children of Tibetan lay officials could either choose to study at home with a tutor or in a monastery in *Bstan 'dzin dpal 'byor*'s days, and the monks of *Smin grol gling Monastery* were in charge of tutoring of them. Second, with respect to the education contents, *Bstan 'dzin dpal 'byor* learnt how to read and write, mainly studied grammar, poetry and astronomy, and mastered military art. These were not specialized studies, but traditional cultural studies that the children of the Tibetan aristocracy were expected to learn. Third, it is believed that children of Tibetan aristocracy had to graduate from *Rtsis khang slob grwa*, a government school for lay officials, in order to become lay officials. However, during that era, they could become lay officials without studying at this school under the influence of the custom that a child could inherit his father's official post. Fourth, *Bstan 'dzin dpal 'byor* learned Mongolian in addition to traditional studies. Mongolian was useful for him to communicate with not only Chinese officials but also with *Emperor Qianlong*. Although Mongolian was considered to be a common language in Tibet and China during that period; however, for Tibetans, Mongolian was just a tool for maintaining a good political relationship with China, and not for academic use.

Keywords: Education, Lay officials, *Bstan 'dzin dpal 'byor*, *Rtsis khang slob grwa*, Mongolian